

〈原著論文〉

LGBT認識とLGBTイメージにおける看護系大学生および社会人の相違

Differences in LGBT recognition and image between nursing college students and adults

中川愛¹ 吉村小春¹ 松尾篤弥² 吉川織江³ 黒米佐和⁴ 佐藤佑衣³
福井彩花⁵ 山本ゆり子⁶ 小嶋奈都子⁷ 志村智絵⁸ 朝澤恭子⁷

1 東京医療保健大学大学院看護学研究科 2 国立病院機構東京病院
3 東京慈恵会医科大学付属病院 4 東京慈恵会医科大学葛飾医療センター
5 聖路加国際大学看護学研究科 6 東京都済生会中央病院
7 東京医療保健大学東が丘看護学部 8 帝京平成大学

Megumi NAKAGAWA¹, Koharu YOSHIMURA¹, Tokuya MATSUO²
Orie KIKKAWA³, Sawa KUROYONE⁴, Yui SATO³
Ayaka FUKUI⁵, Yuriko YAMAMOTO⁶, Natsuko KOJIMA⁷
Chie SHIMURA⁸, Kyoko ASAZAWA⁷

1 Department of Nursing, Faculty of Nursing, Graduate school of Nursing, Tokyo Healthcare University
2 National Hospital Organization Tokyo National Hospital
3 The Jikei University Hospital
4 The Jikei University Katsushika Medical Center
5 St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
6 Saiseikai Central Hospital
7 Division of Nursing, Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University
8 Teikyo Heisei University

要 旨：目的：LGBT 認識と LGBT イメージにおける看護系大学生および社会人の相違を明らかにする。

方法：学生と社会人を対象に、性に関する背景、LGBT 認識、LGBT イメージについて 2019 年 4～5 月に量的記述的横断研究を行った。無記名自記式調査票を 1344 名に配布し留め置きまたは個別郵送法で回収した。t 検定、 χ^2 検定、多重比較、重回帰分析を用いて分析した。

結果：1014 部回収し、学生 589 名、社会人 369 名から有効回答を得た（有効回答率 71.3%）。LGBT 認識尺度得点は学生群 41.6 点、社会人群 39.2 点であり、学生群が有意に高かった（ $t(645)=6.4$, $p<0.001$ ）。LGBT イメージ尺度得点は学生群 21.7 点、社会人群 20.2 点であり、学生群が有意に高かった（ $t(956)=4.9$, $p<0.001$ ）。

結論：看護系大学生は社会人と比較して LGBT 認識と LGBT イメージが高かった。

Abstract：Purpose：The purpose of this study was to clarify differences between nursing college students' and adults' LGBT recognition and image.

Methods：A quantitative cross-sectional study was conducted with nursing college students and adults from April to May 2019. The contents of the survey comprised attributes, sex background, LGBT recognition scale, and LGBT image scale. After the purpose of the research was explained by researchers to the subjects, an anonymous self-administered questionnaire was distributed, and collected by the placement method or mailing method. In order to examine the difference between students' and

adults' perceptions of LGBT identity and image, t-test, χ^2 test, multiple comparison test, and multiple regression analysis were used.

Results : The analysis included 589 students and 369 adult members of society with valid responses , with a mean valid response rate of 71.3%. The student group scored significantly higher in the LGBT recognition scale (41.6 points) than the adult group (39.2 points) ($t(645) = 6.4, p < 0.001$). Similarly, the student group scored significantly higher on the LGBT image scale (21.7 points) than the adult group (20.2 points) ($t(956) = 4.9, p < 0.001$).

Conclusion : Nursing college students were found to have significantly higher LGBT recognition and image than adults.

キーワード : 性的少数者、意識調査、イメージ、看護学生、断面調査

Keywords : Sexual and Gender Minorities, Consciousness Investigation, Recognition, Students, Nursing, Cross-Sectional Studies

I. はじめに

性的少数者（以下、LGBT : Lesbian, Gay, Bisexual, Transgenderとする）は、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの4つから構成され、何らかの意味で「性」のあり方が多数派と異なる人の総称である¹⁾。2018年の調査では、LGBT当事者の割合は8.9%であり、LGBTという言葉の浸透率は68.5%と、3年間で30%も増加している²⁾。国内の動向として、2016年に東京都渋谷区が「同性パートナーシップ条例」を制定し、同性カップルを法律上の夫婦に相当するとして認める制度を導入した³⁾。2015年には障害の定義の中に性同一性障害が含まれた⁴⁾。また、職場において、性的指向または性自認にかかわらず被害者とみなし、防止措置の対象とすることが明確化された⁵⁾。このように、近年は法の整備や対応の定着が進んでいる。

日本の中学校で行う性教育の内容で、性の多様性について触れていた学校は10%以下である^{1)・6)}。LGBTという言葉は浸透しつつあるものの、実際には十分に教育が行われておらず、社会での差別や偏見もある状況であり、LGBTに対するイメージが不透明である。LGBT当事者は認識の低い人から無意識に発せられるLGBTに対する差別的な発言、行動、セクシュアリティの押し付けにより自己嫌悪や孤独感を抱きやすく⁷⁾、自尊心が低い傾向にある⁸⁾。また、LGBT当事者は自殺率が高く⁹⁾、摂食障害になりやすい¹⁰⁾。このように、LGBT当事者は健康に関して抱える課題が多い現状がある。

加えて、LGBT当事者は就職活動の面接打ち切りや、同性のパートナーとの公共住宅への申し込みに対する拒否などの困難がある^{11)・12)}。医療の現場では、家族として法的な関係にないためLGBTのパートナーと面会できないこと、医療機関で戸籍上の名前で呼ばれ性自認とは異なることの屈辱、戸籍上の性別と外見の性別に差があることによる周囲からの奇異の目があるために受診しづらい現状もある。さらに、パートナーの治療内容の説明が受けられないこと、戸籍の性で分類されることの精神的負担も報告されている^{11)・12)}。医療の現場でもLGBT当事者への対応が不十分であり、適切な対応を整備する必要がある。

先行研究において、同性愛に対する知識量が多いほどLGBTへの理解に良い影響を与える¹⁴⁾。LGBTに対しての知識を多く持つことはLGBTへの寛容的態度の高さと関連する¹⁵⁾。この結果からもLGBTに対する知識をより深めることで、LGBTへの理解とLGBT当事者の生活上の問題点解決に繋がると考える。

日本では1997年から性同一障害を抱える人に対して身体的治療が行われている¹⁶⁾。米国ではトランスジェンダーに対する性別適合手術の件数が15年間で4倍と急増している¹⁷⁾。看護者は患者および家族に対して手術や治療に対する説明やオリエンテーションを行い、不安や質問にこたえる立場にある。これらの業務を円滑に行い、患者および家族に不安なく医療を受けてもらうにあたり、患者本人だけでなく家族のLGBTに対する理解と知識、許容が不可欠である。LGBTの患者本人と家族との認識のギャップがなく、LGBTの認識や治療の方向性が一致していることが望まれる。

患者本人だけでなく家族に対しても、LGBTの方への治療、受診、サポート内容を伝えることも、看護者が果たす役割の一つである。特に今後看護者となる看護系大学生の青年層だけでなく、多くの患者となる年代の中高年層の理解を深める必要がある。そこで、学生および社会人といった様々な世代の方々のLGBTの認識およびイメージを明らかにし、その度合いと属性の関連を知ることにより、ギャップへの対策の示唆が得られるのではないかと考えた。

本研究の目的は、看護系大学生のLGBTの患者および社会人への関わり方の示唆を得るために、LGBT認識とLGBTイメージにおける看護系大学生および社会人の相違を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 研究デザイン：量的横断的記述研究である。

2. 調査対象

18歳以上の看護系大学に所属する学生または社会人であり、日本語でコミュニケーションがとれ、回答が可能な人を対象者とした。研究協力施設は研究者らがアクセス可能であり研究協力が得られた看護系大学1施設、老人保健施設1施設、民間企業1施設であった。これら3施設において看護系大学生、大学生の家族、施設職員、企業職員に研究協力を依頼した。サンプルサイズは有意水準 $\alpha=0.05$ 、検出力power $(1-\beta \text{ error prob})=0.8$ 、小程度効果量 $d=0.2$ の場合、一群392名であり¹⁸⁾、回収率60%を予想し、学生群と社会人群合わせて1300名と算出した。

3. 調査方法

研究協力施設の施設長に研究協力の同意を得た。研究者らが研究対象候補者に調査を依頼し、研究協力の了承が得られた研究対象者に対し調査票を配布した。回収方法は留め置き法および個別郵送法を用いた。調査期間は2019年4月から5月までであった。

4. 調査内容

調査内容は下記35項目とした。

- 1) 属性：年齢、就労の有無、学年、職種、対象者の周囲の人々の多様性への理解、出身高の種類、既往歴、生殖器系疾患経験の回答を求めた。出身校は中学または高校のどちらかでも在校の場合は男子校または女子高の選択を優先する回答を得た。
- 2) 性や性別に関する背景：戸籍上の性別、社会での性別、こころの性別、LGBT当事者、こころの性別について悩んだ経験、対象者の周囲の人々の性の悩み経験者の有無、LGBTを告白された経験、

LGBTの学習経験、LGBTを知ったきっかけについて回答を求めた。

3) LGBT認識尺度：LGBT認識を測定するために、LGBT recognition scale 10項目を用いて回答を求めた。この尺度はAsazawaら¹⁹⁾により開発されており、LGBTの知識、理解、許容度が下位尺度である。信頼性と妥当性は開発者らにより確認されており、因子負荷量は0.36～0.96、寄与率は64.1、Cronbach's α は0.83を示す。得点範囲は10～50点であり、高得点ほどLGBT認識が高いことを示す。本研究において、対象者背景の相違があるため、尺度の信頼性および妥当性の再確認を行った。

4) LGBTイメージ尺度：LGBT当事者のイメージを測定する質問項目は、既存の尺度がないため、LGBTまたは疾病のイメージに関する文献²⁰⁾⁻²²⁾を参考に、研究者らがLGBT当事者の身体的・精神的な状況と環境に対する良好なイメージを測ることを想定し作成した。LGBTイメージ尺度原版は全8項目であり、「LGBT当事者は他の人と変わっている」「LGBT当事者は生活上困っている」「LGBT当事者は差別されている」「LGBT当事者は孤独である」「LGBT当事者は身体が弱い」「LGBT当事者は人と親密になりにくい」「LGBT当事者は恋愛しづらい」「LGBT当事者は結婚しづらい」で構成される。「まったくそう思わない」5点、「あまりそう思わない」4点、「どちらでもない」3点、「少しそう思う」2点、「強くそう思う」1点の5件法で回答を求めた。高得点であるほど、LGBT当事者の身体的・精神的な状況と環境に対しての良好なイメージが高いことを示す。信頼性と妥当性は本研究で検討した。本調査において、看護系大学生および社会人におけるLGBTの良好なイメージの高さを測定するために使用した。

5. 分析方法

分析には統計ソフト SPSS Statistics Version24 (IBM, Armonk, NY, USA) を使用し、記述統計量を算出した。LGBT認識尺度は因子分析と信頼性分析で信頼性と妥当性を再確認した。LGBTイメージ尺度は因子分析、相関分析、信頼性分析を用いて信頼性と妥当性を検討した。学生群と社会人群の相違はt検定、 χ^2 検定またはFisherの直接確率検定を用いた。LGBT認識、LGBTイメージと属性との関連はt検定、多重比較 (tukey法)、重回帰分析を用いて、有意水準は5%とした。

6. 倫理的配慮

対象者に対して、研究参加を拒否しても不利益を被ることは一切ないこと、研究参加は自由意思であること、研究参加の了承後でも提出前であれば途中で中止することができることを口頭と書面で説明した。研究協力施設長には同意書への署名をもらい、対象者には調査票の回収をもって研究参加への同意とみなした。特に大学生に対しては研究参加しなくても一切学業には影響のないこと、無記名であること、参加の有無を研究者らは知り得ないことを説明し、パワーがかからないように配慮した。東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認（承認番号30-47B）を得て実施した。

Ⅲ. 結果

調査票を対象者1344名に配布し、有効回答958部、学生群589名（61.5%）および社会人369名（38.5%）を用いてデータ分析を行った（有効回答率71.3%）。

1. 対象者の属性（表1）

対象者の年齢は、20歳代が最多で327名（34.1%）、70歳代以上が最少で25名（2.6%）であった。学生は10歳代53.7%が最多で、社会人は50歳代28.2%が最多であった。出身校の種類は、共学75.8%、男子校4.4%、

女子校19.8%であった。既往歴がある人は35.2%、生殖器系疾患がある人は10.1%であった。学生群と社会人との有意な相違として、社会人は既往歴が多く（ $\chi^2 = 21.3$, $p < 0.001$ ）、生殖器系疾患ありも多かった（ $\chi^2 = 61.5$, $p < 0.001$ ）。

2. 性や性別に関する背景（表2）

男性と回答とした人のうち、戸籍上の性別は18.2%、社会上での性別は18.3%、こころの性別は18.2%であった。一方、戸籍上の性別を女性と回答した人は81.8%、社会上の性別女性は81.7%、こころの性別女性は80.8%であった。こころの性別は分からないと答えた人が1.0%であり、LGBT当事者と回答した人は12名（1.3%）であった。こころの性別で悩んだ経験ありが2.1%、周囲に性の悩んだ経験ありが14.4%、LGBTと告白された経験者が20.9%、LGBTについて学習した経験者が53.2%であった。LGBTを知ったきっかけは多い順に、ニュース28.1%、ドラマ・書籍24.5%、家族・友人との会話16.2%であった。学生は社会人に比べてLGBTの学習経験が多かった（ $\chi^2 = 141.6$, $p < 0.001$ ）。

3. LGBT認識尺度とLGBTイメージ尺度の妥当性と信頼性の検討（表3）

LGBT認識尺度の妥当性と信頼性を再確認するために因子分析（最尤法、プロマックス回転）および信頼

表1 対象者の属性（N=958）

項目		対象者		学生 (n=589)		社会人 (n=369)		χ^2 値	p値
		n	%	n	%	n	%		
年齢	10歳代	317	33.1	316	53.7	1	0.3	1.2	0.273
	20歳代	327	34.1	270	45.8	57	15.4		
	30歳代	58	6.1	2	0.3	56	15.2		
	40歳代	97	10.1	1	0.2	96	26.0		
	50歳代	104	10.9	0	0	104	28.2		
	60歳代	30	3.1	0	0	30	8.1		
	70歳代以上	25	2.6	0	0	25	6.8		
立場	学生	589	61.5	589	100	0	0.0	21.3	<0.001
	就労者	282	29.4	0	0	282	76.4		
	主婦・主夫	74	7.7	0	0	74	20.1		
	その他	13	1.4	0	0	13	3.5		
周囲の多様性理解	あり	366	38.2	217	36.8	149	40.4	61.5	<0.001
	なし・わからない	597	61.8	372	63.2	220	59.6		
出身校の種類	共学	726	75.8	481	81.7	245	66.4	21.3	<0.001
	男子校	42	4.4	5	0.8	37	10.0		
	女子校	190	19.8	103	17.5	87	23.6		
既往歴	あり	337	35.2	174	29.5	163	44.2	61.5	<0.001
	なし	621	64.8	415	70.5	206	55.8		
生殖器系疾患	あり	97	10.1	24	4.1	73	19.8	61.5	<0.001
	なし	861	89.9	565	95.9	296	80.2		

χ^2 検定または Fisherの直接確率検定. *** $p < 0.001$

表2 性や性別に関する背景 (N=958)

項目		対象者		学生(n=589)		社会人(n=369)		χ^2 値	p値
		n	%	n	%	n	%		
戸籍上の性別	男性	174	18.2	52	8.8	122	33.1	89.6	<0.001
	女性	784	81.8	537	91.2	247	66.9		
社会上の性別	男性	175	18.3	52	8.8	123	33.3	91.2	<0.001
	女性	783	81.7	537	91.2	246	66.7		
こころの性別	男性	174	18.2	52	8.8	122	33.1		<0.001
	女性	774	80.8	531	90.2	243	65.9		
LGBT当事者	分からない	10	1.0	6	1.0	4	1.1		0.156
	はい	12	1.3	5	0.8	7	1.9		
	いいえ	946	98.7	584	99.2	362	98.1		
こころの性別で悩んだ経験	あり	20	2.1	15	2.5	5	1.4		0.251
	なし	938	97.9	574	97.5	364	98.6		
周囲に性の悩み経験者	あり	138	14.4	89	15.1	49	13.3	0.6	0.432
	なし	820	85.6	500	84.9	320	86.7		
LGBTを告白された経験	あり	200	20.9	130	22.1	70	19.0	1.3	0.250
	なし	758	79.1	459	77.9	299	81.0		
LGBT学習経験	あり	510	53.2	403	68.4	107	29.0	142	<0.001
	なし	448	46.8	186	31.6	262	71.0		
LGBTを知ったきっかけ	ニュース	269	28.1	135	22.9	134	36.3	37.5	<0.001
	ドラマ・書籍	235	24.5	131	22.2	104	28.2		
	家族・友人との会話	155	16.2	107	18.2	48	13.0		
	インターネット	112	11.7	83	14.1	29	7.9		
	その他	167	17.4	121	20.5	46	12.5		
	なし	20	2.1	12	2.0	8	2.2		

 χ^2 検定または Fisherの直接確率検定. ***p<0.001

性分析を行った。その結果、因子負荷量は0.37から0.98、負荷量平方和は63.0%、Cronbach's α は10項目で0.83であった。本研究においてもLGBT認識尺度の信頼性と妥当性が再確認された。LGBTイメージ尺度についても妥当性と信頼性を確認するために因子分析（最尤法，プロマックス回転）と信頼性分析を行った。8項目で分析したところLGBTイメージ尺度の1項目の共

通性が0.082と低く因子負荷量が0.23であった。そのため1項目を除外し、7項目で再度因子分析（最尤法）を行った。その結果、表3の通り内容的に妥当な因子構造が得られ、1因子7項目からなる質問項目を採択しLGBTイメージ尺度とした。Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.72、7項目の負荷量平方和は55.9%、因子負荷量は全ての項目で0.48以上であっ

表3 尺度の信頼性と妥当性の検討 (N=958)

LGBT認識尺度 および下位尺度	mean	SD	項目	因子負荷量	共通性	負荷量 平方和	Cronbach's α
LGBT認識尺度	40.7	5.5	10	0.37-0.98	0.30-0.95	63.0	0.83
LGBTの知識	10.8	2.4	3	0.64-0.98	0.74-0.79	36.8	0.79
LGBTの理解	12.2	2.2	3	0.52-0.96	0.31-0.82	18.4	0.83
LGBTの許容度	17.7	2.7	4	0.37-0.98	0.30-0.95	7.8	0.82
LGBTイメージ尺度の項目				因子負荷量	共通性	負荷量 平方和	Cronbach's α
Q7.LGBT当事者は恋愛しづらい				0.93	0.47		
Q4.LGBT当事者は孤独である				0.64	0.36		
Q8.LGBT当事者は結婚しづらい				0.61	0.43		
Q3.LGBT当事者は差別されている				0.60	0.36	55.9	0.76
Q6.LGBT当事者は人と親密になりにく				0.60	0.39		
Q2.LGBT当事者は生活上困っている				0.56	0.33		
Q5.LGBT当事者は身体が弱い				0.48	0.36		

因子分析（最尤法，プロマックス回転），信頼性分析

た。LGBTイメージ尺度の7項目全体のCronbach's α は0.76であった。基準関連妥当性の検討のために、LGBT認識尺度とLGBTイメージ尺度のPearson相関係数を算出したところ、 $r=0.37$ の正の相関が1%水準で確認された。次に探索的因子分析で得られた仮説モデルの適合度を確認的因子分析で検討した。1因子を潜在変数とした場合の適合度指標は、GFIが0.983、AGFIが0.947、GFI 0.9以上、AGFI 0.85以上の基準およびGFI>AGFIの基準を満たしていた。CFIは0.971であり0.9以上の基準を満たしており、RMSEAは0.078であり0.08未満の基準を満たしていた。潜在変数-観測変数間には7項目において0.45以上の妥当なパス係数が得られた。探索的因子分析および確認的因子分析による構成概念妥当性、相関分析による基準関連妥当性、信頼性分析による内的整合性が確認され、LGBTイメージ尺度は1因子7項目であることが確認された。したがって、LGBT認識尺度10項目、LGBTイメージ尺度7項目は同一概念の因子を持つことの信頼性と妥当性が確認された。

4. LGBT認識とLGBTイメージに関する学生および社会人の相違 (表4)

LGBT認識尺度得点とLGBTイメージ尺度得点の属性による差を検討するために、属性の2群間はt検定を、3群以上は多重比較 (Tukey法) を用いた。立場に関して、LGBT認識尺度得点は学生群41.6点、社会人39.2点であり、学生群が有意に高かった ($t(645)=6.4$, $p<0.001$)。また、LGBT認識と対象者の立場について、就労者、学生、主婦・主夫、その他の立場4群で多重比較を検討したところ、主婦・主夫群38.1点が就労者39.5点、学生41.6点より有意に低かった ($p<0.001$)。さらに、データの性別による偏りを無くすため、女性就労者群と主婦群に分け、対応のないt検定を用いて検討した。LGBT認識尺度得点は、女性就労者群が40.5点、主婦群38.3点であり、女性就労者群が有意に高かった。 ($t(240)=13.1$, $p<0.001$)。また、対象者の年齢を青年群 (18~29歳)、壮年群 (30~59歳)、老年群 (60歳以上) の3群に分けた際は、青年群41.6点は壮年群39.6点および老年群34.8点に比べ有意に高かった ($p<0.001$)。

次に、LGBTイメージの学生と社会人の立場による差を検討するために、学生群と社会人群に分け、対応のないt検定を用いて検討した。LGBTイメージ尺度得点は学生群21.7点、社会人20.2点であり、学生群が有意に高かった ($t(956)=4.9$, $p<0.001$)。さらに、LGBTイメージ尺度得点は女性就労者群が20.2点、主婦群19.9点であり、女性就労者群が有意に高かった ($t(956)=6.8$, $p<0.001$)。年代別LGBTイメージ尺度得

点は、青年群21.6点が壮年群19.9点に比べ有意に高かった ($p<0.001$)。LGBTを告白された経験別LGBTイメージ尺度得点は、告白された経験あり群22.1点が、告白された経験なし・分からない群20.9点より有意に高かった ($t(956)=3.3$, $p=0.001$)。

5. LGBT認識とLGBTイメージの関連要因 (表5, 表6)

LGBT認識に対する関連要因を検討するために重回帰分析を行った。従属変数をLGBT認識得点とし、独立変数に「年齢」「既往歴」「生殖器系疾患歴」「性別」「LGBT当事者」「心の性別で悩んだ経験」「周囲に性の悩み経験者」「LGBTを知ったきっかけ」「周囲の多様性への理解あり」「LGBT学習経験」「LGBTを告白された経験」の11項目を設定し、強制投入法を用いて分析を行った。独立変数が名義尺度の場合はダミー変数に置き換えた。独立変数は、どのような属性および性や性別に関する背景を持つかの関連を明らかにするために、本研究で χ^2 検定、t検定、多重比較で有意差が確認されている項目を中心に設定した。その結果、 $F=24.0$, $p<0.001$ であり、 R^2 は0.218であった。LGBT認識に対して「性別女性」 $\beta=0.20$ ($p<0.001$)、「LGBTを知ったきっかけ」 $\beta=0.06$ ($p=0.044$)、「周囲の多様性への理解あり」 $\beta=0.10$ ($p<0.001$)、「LGBT学習経験」 $\beta=0.25$ ($p<0.001$) が有意に正の影響を与えており、「年齢」 $\beta=-0.14$ ($p<0.001$) が有意に負の影響を与えていた (表5)。学生群および社会人群のサブグループ分析を行った結果の相違点は、学生群は「周囲の多様性への理解あり」が有意に正の影響を与え、社会人群は「LGBTを知ったきっかけ」が有意に正の影響を与え、「年齢」が有意に負の影響を与えて関連していることであった。

次に、LGBTイメージに対する関連要因を検討するために重回帰分析を行った。従属変数をLGBTイメージ得点とし、独立変数に「年齢」「既往歴」「生殖器系疾患歴」「性別」「LGBT当事者」「心の性別で悩んだ経験」「周囲に性の悩み経験者」「LGBTを知ったきっかけ」「周囲の多様性への理解あり」「LGBTの学習経験」「LGBTを告白された経験」の11項目を設定し、強制投入法を用いて分析を行った。独立変数が名義尺度の場合はダミー変数に置き換えた。その結果、 $F=3.5$, $p<0.001$ であり、 R^2 は0.039であった。LGBTイメージに対して、「LGBTを告白された経験」 $\beta=0.11$ ($p=0.005$) が有意に正の影響を与え、「年齢」 $\beta=-0.16$ ($p<0.001$) が有意に負の影響を与えていた (表6)。学生群および社会人群のサブグループ分析を行った結果の相違点は、学生群は「LGBTを告白された経験」が有意に正の影響を与え、社会人群は関連要因が

表4 対象者の属性別得点差 (N=958)

	項目	n	%	LGBT認識		LGBTイメージ	
				mean	SD	mean	SD
立場2群	学生	589	61.5	41.6 ± 4.9	***	21.7 ± 4.6	***
	社会人	369	38.5	39.2 ± 6.2		20.2 ± 4.5	
立場4群	就労者	282	61.5	39.5 ± 6.2	***	20.2 ± 4.3	***
	学生	589	29.4	41.6 ± 4.9		21.7 ± 4.6	
	主婦・主夫	74	7.7	38.1 ± 5.8		20.1 ± 4.8	
	その他	13	1.4	37.2 ± 7.0		21.6 ± 6.2	
年齢	青年群 (18～29歳)	644	67.2	41.6 ± 4.9	***	21.6 ± 5.0	***
	壮年群 (30～59歳)	259	27.0	39.6 ± 5.4		19.9 ± 4.5	
	老年群 (60歳以上)	55	5.7	34.8 ± 8.3		20.7 ± 5.3	
女性立場2群 (n=242)	就労者	171	70.7	40.5 ± 5.5	***	20.2 ± 4.6	**
	主婦	71	29.3	38.3 ± 5.8		19.9 ± 4.8	
職種 (n=282)	会社員	134	47.5	38.1 ± 6.9	**	20.2 ± 4.3	
	医療関係	86	30.5	41.4 ± 4.9		20.2 ± 4.4	
	教育関係	12	4.3	39.9 ± 4.8		20.2 ± 3.3	
	自営業	11	3.9	38.6 ± 8.1		19.6 ± 5.5	
	ファッション・美容	6	2.1	38.5 ± 6.6		22.0 ± 4.6	
	その他	33	11.7	41.2 ± 3.9		19.9 ± 4.1	
	その他	33	11.7	41.2 ± 3.9		19.9 ± 4.1	
周囲の多様性 理解	あり	366	38.2	41.7 ± 5.5	***	21.1 ± 4.8	
	なし・わからない	592	61.8	40.1 ± 5.5		21.1 ± 4.5	
出身校の種類	共学校	726	75.8	40.8 ± 5.6	***	21.2 ± 4.6	
	男子校	42	4.4	37.4 ± 6.0		20.3 ± 4.2	
	女子校	190	19.8	41.0 ± 5.1		21.0 ± 4.7	
戸籍上の性別	男性	174	18.2	37.9 ± 6.8	***	20.5 ± 4.2	
	女性	784	81.8	41.3 ± 5.0		21.2 ± 4.7	
社会上の性別	男性	175	18.3	37.9 ± 6.7	***	20.5 ± 4.2	
	女性	783	81.7	41.3 ± 5.0		21.2 ± 4.7	
こころの性別	男性	174	18.2	37.9 ± 6.8	***	20.5 ± 4.3	
	女性	774	80.8	41.3 ± 5.0		21.3 ± 4.7	
	分からない	10	1.0	43.6 ± 2.7		20.2 ± 3.8	
周囲に性の悩 み経験者	あり	138	14.4	43.0 ± 5.2	***	21.6 ± 4.4	
	なし	618	64.5	40.0 ± 5.6		21.0 ± 4.5	
	わからない	202	21.1	41.3 ± 5.1		21.1 ± 5.1	
LGBTを告白さ れた経験	あり	200	20.9	42.6 ± 5.2	***	22.1 ± 4.8	**
	なし・わからない	758	79.1	40.2 ± 5.5		20.9 ± 4.5	
LGBT学習経験	あり	510	53.2	42.5 ± 4.3	***	21.4 ± 4.6	
	なし	416	43.4	38.4 ± 6.1		20.9 ± 4.6	
	わからない	32	3.3	40.8 ± 5.7		19.8 ± 4.7	
LGBTを知った きっかけ	あり	938	97.9	40.8 ± 5.4	***	21.1 ± 4.6	
	なし	20	2.1	36.1 ± 8.3		21.4 ± 6.8	

2項目の場合は対応のないt検定, 3項目以上の場合は多重比較 (Tukey法) を実施

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

t検定, 多重比較による有意確率は比較部分にアスタリスクを明記

なかったことであった。

IV. 考察

1. 対象者の特徴

本研究の対象者を学生と社会人の2群間で比較をしたところ、相違点は既往歴、生殖系疾患、LGBT学習経験であった。学生と社会人では年齢層と罹患に相違があることは身体的な側面より順当であると考えられる。LGBT認識の相違に関して、学生は周囲の多様性への理解が認識を高める要因の一つであり、社会人は

年齢の低さが認識を高める要因の一つであった。また、LGBTイメージの相違に関して、学生はLGBTを告白された経験があることがイメージを高める要因であり、社会人はイメージを高める要因が抽出されなかった。日向ら²³⁾によると、看護学生は他領域の学生に比べて、大学の授業などで取り上げられる機会が得られるため、性同一性障害の学習経験が多い。本研究においても、学生の対象者は看護系大学生であったため、LGBTの知識を得る環境が整っていること、LGBTを知る機会があることが認識を高める要因と考えられ

表5 LGBT認識の関連要因 (N=958)

LGBT認識の要因	対象者 (N=958)		学生 (n=589)		社会人 (n=369)	
	β	p	β	p	β	p
年齢	-0.14	<0.001***	-0.02	0.64	-0.20	<0.001***
既往歴あり	0.05	0.124	0.04	0.36	0.08	0.11
生殖器系疾患歴あり	0.01	0.79	0.00	0.92	0.03	0.52
性別女性	0.20	<0.001***	0.22	<0.001***	0.22	<0.001***
LGBT当事者である	0.01	0.797	0.01	0.819	0.01	0.79
こころの性別で悩んだ経験あり	0.02	0.54	0.02	0.59	0.03	0.55
周囲に性の悩み経験者あり	0.06	0.080	0.06	0.22	0.07	0.28
LGBTを知ったきっかけあり	0.06	0.044 *	0.01	0.77	0.14	0 **
周囲の多様性への理解あり	0.10	<0.001***	0.11	0 **	0.08	0.08
LGBT学習経験あり	0.25	<0.001***	0.24	<0.001***	0.27	<0.001***
LGBTを告白された経験あり	0.07	0.05	0.08	0.09	0.03	0.6
R ²	0.22		0.15		0.26	
F	24.0	<0.001***	9.1	<0.001***	11.1	<0.001***

重回帰分析 (強制投入法) . *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

R²=決定係数, β =標準偏回帰係数, F=分散分析の検定統計量

る。

2. LGBT認識を高めるために

学生はLGBTの学習経験が社会人より多く、周囲のダイバーシティの浸透があるために、LGBTの認識が高いことが明らかとなった。社会人は学生に比べるとLGBTの学習経験が少なく、イメージの良さに影響する要因がなかった。今後は性的マイノリティの方々の増加に伴い、社会の様々な場で接する機会が増えると考えられる。したがって、LGBTに関する社内体制の情報提供や風土醸成のセミナーなどで学習機会を増やすことが提案される。医療者においては受講により、LGBT当事者の健康課題に対応したり、当事者の面会や病状説明のニーズに合った対応をしたり、より理解のある対応に貢献できると考えられる。

LGBTを知ったきっかけにより認識尺度得点に有意な差が確認された。インターネットが最も高く、ニュースが最も低かった。総務省²⁴⁾によると、インターネットは匿名性が強い。匿名性のあるインターネット上ではLGBT当事者も世間からの偏見や日常生活への影響を心配することがないため、情報を発信しやすい。そのためインターネット上では当事者の声に触れる機会が多くなると推測される。SNSや研修、地域での講習会を地道に重ねることによりLGBT認識を高める必要がある。程ら²⁵⁾によると、学校教育においてジェンダー教育が欠落しており、セクシュアリティ教育として、人権と多様性の尊重が必要である。Mayerら²⁶⁾によると、LGBTの人々は医療現場で差別を受けた経験から、適切な医療サービスへのアクセスを控える傾向にある。学校教育、医療現場の双方で、LGBT認識

を高める教育が必要である。特に、世代に合わせた情報提供をしていくことで、認識が高まり、LGBT当事者が生きやすい社会になると考える。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究は学生を対象者が看護系大学生であったことから男子学生の回答が少なく、対象の背景が一般の大学生と相違がある点、首都圏に在住の対象者が多い点、データの偏りがある。LGBTイメージ尺度は本研究において構成概念の確認が行われており、尺度は一定の妥当性を得た。今後はtest-retest法や級内相関係数の算出により、さらなる安定性確認による信頼性の検証が課題である。潜在変数-観測変数間において0.5以上のパス係数が一部得られていないこと、基準関連妥当性検討のための相関係数が $r=0.37$ と高くないことより、さらなる検証も課題である。また、LGBTイメージの重回帰分析において、決定係数が低いこと、社会人ではF値が有意でないことから、2関連要因の解釈には慎重を要する。看護場面で活かすためには看護職員を対象に調査を継続していくことが必要であると考えられる。今後は、世代に合わせた方法でLGBTに関する情報提供をしていくことで、LGBT認識を推進浸透させる必要がある。

V. 結論

1. 看護系大学生と社会人の背景の相違は、学生は社会人より既往歴のある人が少なく、生殖器疾患歴のある人が少なく、LGBT学習経験のある人が多いことであった。

表6 LGBTイメージの関連要因 (N=958)

対象者 (N=958)			学生 (n=589)		社会人 (n=369)	
LGBTイメージの要因	β	p	β	p	β	p
年齢	-0.16	<0.001 ***	-0.06	0.19	-1.59	0.11
既往歴あり	0.02	0.554	0.01	0.84	1.07	0.29
生殖器系疾患歴あり	0.03	0.340	0.02	0.560	1.27	0.2
性別女性	0.02	0.492	0.02	0.622	0.16	0.87
LGBT当事者である	0.00	0.912	0.02	0.560	0.39	0.69
こころの性別で悩んだ経験あり	0.01	0.69	0.03	0.5	0.14	0.89
周囲に性の悩み経験者あり	0.04	0.372	0.00	0.95	1.12	0.27
LGBTを知ったきっかけあり	0.01	0.653	0.03	0.48	0.10	0.92
周囲の多様性への理解あり	0.00	0.943	0.01	0.87	0.33	0.75
LGBT学習経験あり	0.01	0.875	0.03	0.529	1.23	0.22
LGBTを告白された経験あり	0.11	0.001 **	0.11	0.03 *	1.90	0.06
R ²	0.04		0.02		0.031	
F	3.5	<0.001 ***	6.4	0.011 *	1.0	0.417

重回帰分析 (強制投入法) . *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

R²=決定係数, β =標準偏回帰係数, F=分散分析の検定統計量

2. 看護系大学生と社会人のLGBTに関する相違は、学生は社会人よりLGBT認識が高く、LGBTイメージの良さが高いことであった。
3. LGBT認識の高まりは、学生はダイバーシティの浸透があること、社会人はLGBTを知るきっかけがあること、両群とも年齢が若いことが影響していた。LGBTのイメージの良さは、学生はLGBTを告白された経験が影響し、社会人は要因が抽出されなかった。

謝辞

本研究の調査にご協力くださった皆様に心より厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 日高庸晴, 星野慎二, 長野香, 福島静恵. LGBTQを知っていますか? “みんなと違う”は“ヘンじゃない”. 初版. 東京: 少年写真新聞社. 2015; 14, 87.
- 2) 電通ダイバーラボ. 電通news release. 2018. 2019年3月11日検索
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2019002-0110.pdf>
- 3) 藤井ひろみ. よくわかるLGBT—多様な「性」を理解しよう—. 初版. 東京: 株式会社PHP研究所. 2017; 14-57.
- 4) 日本弁護士連合会. 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律のガイドラインについての意見書.

2015. 2019年4月1日検索.

http://www.nichibenren.or.jp/library/ja/opinion/report/data/2015/opinion_150716_4.pdf.

- 5) 厚生労働省, 事業主が職場における性的な言動に起因する問題に関して雇用管理上講ずべき措置についての指針, 2016. 厚生労働省告示第314号. 2019年3月11日検索
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000133451.pdf>
- 6) 橋本紀子, 篠原久枝, 田代美江子, 他. 日本の中学校における性教育の現状と課題. 教育学研究室紀要: 「教育とジェンダー」研究 2011; 9: 3-20.
- 7) 厚生労働省. 自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～. 2018. 2019年3月22日検索
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000172203.html>
- 8) Shinohara Y, Nakatsuka M. Descriptive Study of Gender Dysphoria in Japanese Individuals with Male-to-Female Gender Identity Disorder. Acta medica Okayama 2018; 72(2):143-151.
- 9) Peter T, Edkins T, Watson R, Adjei J, Homma Y, Saewyc E. Trends in suicidality among sexual minority and heterosexual students in a Canadian population-based cohort study. Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity 2017; 4(1):115-123.
- 10) Watson RJ, Adjei J, Saewyc E, Homma Y,

- Goodenow C. Trends and disparities in disordered eating among heterosexual and sexual minority adolescents. *International Journal of Eating Disorders* 2017;50(1):22-31.
- 11) 中西 絵里. LGBTの現状と課題. 立法と調査2017: No.394:3-17.
- 12) LGBT法連合会. 性的指向および性自認を理由とするわたしたちが社会で直面する困難のリスト.第2版.2015.2019年3月29日 検索.http://lgbtetc.jp/pdf/list_20150830.pdf
- 13) 浅沼 智也. nursingとeducationとLGBTQ (第2回) 性同一性の"障害"? 看護教育 2018;59(5):419.
- 14) 登坂如恵. 青年期における同性愛への態度に関する研究-ジェンダー・アイデンティティおよび同性愛についての知識との関連から.東北大学大学院教育学研究科 修士論文 2016;1-59.
- 15) 石原英樹. 日本における同性愛に対する寛容性の拡大—「世界価値観調査」から探るメカニズム—.相関社会科学2012;22:23-41.
- 16) 百澤明, 樋野忠司, 三鍋俊春. 性同一性障害に対する手術治療の現況. 山梨医科大学誌2013;27(3):101-107.
- 17) Canner JK, Harfouch O, Kodadek LM, et al. Temporal Trends in Gender-Affirming Surgery Among Transgender Patients in the United States. *JAMA Surg* 2018;153(7):609-616.
- 18) Cohen J. A power primer. *Psychol Bull.* 1992;112(1):155-159.
- 19) Asazawa K, Inamoto A, Suzuki M, et al. Predictors of LGBT Recognition by Health Sciences University Students in Japan. *Open Journal of Nursing* 2019;9(5):481-493.
- 20) 薬師実芳, 笹原千奈未, 古堂達也, 小川奈津己. LGBTってなんだろう?からだの性・こころの性・好きになる性. 初版.東京:合同出版株式会社.2017;85-86.
- 21) 飯田敏晴, いとうたけひこ, 井上孝代.HIV自己イメージ尺度 (HIVSIS) 信頼性と妥当性の検討—予防的介入プログラムの開発に役立つ尺度の作成.コミュニティ心理学研究2012;16(1):39-54.
- 22) 金政裕司.恋愛イメージ尺度の作成とその検証:親密な異性関係成人の愛着スタイルとの関連から.対人社会心理学研究2002;(2):93-101.
- 23) 日向桂子, 高田谷久美子, 近藤洋子.看護学生と他領域の学生の性同一性障害に対する態度や知識と性差観に関する研究.山梨大学看護学会誌2007;6(1),39-44.
- 24) 総務省情報通信政策研究所.「インターネットと匿名性」2008.2019年9月10日検索
<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2008/2008-1-01.pdf>
- 25) 程雪麗, 是永かな子. 特別ニーズ教育としてのLGBT支援の現状と課題 日本におけるLGBTに関する研究動向の検討から, 高知大学学術研究報告2017; 66:19-28.
- 26) Mayer KH, Bradford JB, Makadon HJ, Stall R, Goldhammer H, Landers S. Sexual and gender minority health: what we know and what needs to be done. *American Journal of Public Health*.2008;98(6):989- 995. doi: 10.2105/AJPH.2007.127811.